＜前回：７．イエスの譬え解釈２＞
宗教言語の歴史性・文学性・思想性の再統合に向けて。

A．ミメーシス１：テキストの歴史性

＜テキスト解釈の前提：テキストに対する先行理解＞
１．テキスト読解の先行理解とテキスト生成の先行理解　：Bultmann、Vorverständnis
２．暗黙的な世界理解→古い自己・古い存在、自己の自明性。Als-Struktur
３．「話者－聴衆」の状況（発話状況→言葉の出来事１）、作品作成の先行理解

＜聖書テキストの解釈の適切な出発点：二つの先行理解の合致＞
４．読者の権利、テキストの権利、テキスト形成者（共同体）の権利
５．二つの先行理解に合致の学問的確保としての聖書学（歴史批判）
６．リクール：物語の筋・プロットの作成と行動という実践的世界
　　アリストテレス：行為の再現としての悲劇
　　→ミメーシス１
７．概念のネットワーク、象徴体系、時間性→実践的世界の了解（世界内存在の理解構造）
　　Peter Berger and Thomas Luckmann, *The social Construction of Reality*,
　　Penguin Books　1966（1979）
８．ミメーシス１：範列と連辞との二つの軸（Paradigmatic/Syntagmatic）によって構造化
９．Iser: Textreperotoire
　　Wolfgang Iser, *Der Akt des Lesens*, UTB (W.Fink), 1976.
　　(『行為としての読書』岩波書店)
　　Robert C. Holub, *Reception Theory. A critical introduction*, Routledge, 1984.
　　Robert Evans, *Reception History, Tradition and Biblical Interpretation. Gadamer and Jauss in Current Practice*, Bloomsbery, 2014.

＜史的懐疑主義の克服・方法論的問い＞
＜イエスの譬え解釈に関する歴史的知識＞
　１．譬えの語りの歴史的文脈
　２．譬えの指示するリアリティーの具体的現前としてのイエス運動
　３．譬えのテーマあるいは指示対象（知恵から終末へ）
　４．譬え・運動の帰結としての十字架

B．ミメーシス２：テキストの文学性・言語性

１．テキスト作成：自律的な存在として固定化される→ 一定の完結した形態と構造
２．テキスト：いくつかの小事件からその「主題」を問いうるような意味ある全体（Textkohärenz）として物語を構成
３．ミメーシス１とミメーシス３を媒介：「テキストのストラテジー」（Textstrategien）
　　不確定箇所（インガルテン）
　　「空所」（Leerstellen）の機能：連辞と範列の二つの軸
４．テキストの構造分析
　　構造主義と聖書解釈：構造分析にも歴史的情報は不可欠
５．読解の現象学

読解プロセス：イマジネーション→イメージ形成→意味の了解
感情的負荷

６．イーザーの読解過程の現象学：「主題－地平」構造における記憶・射映・期待
イメージ形成の自己修正的な動的プロセス
イメージ・形態的意味（Sinnkonfiguration）＝テキスト世界の開示
テキストの意図と解釈行為との弁証法（エーコ）

７．解釈すべきテキスト本文の確定、テキストの基本性格の把握（複合性、成立年代、著者と場所）、　文学批判１（本文批判）
テキストの構造分析、テキスト読解における典型的な意味構成過程の再現、
文学批判２、テキストの言語的･文学的機能の理解

８．成功した宗教的テキストの宗教的読解：このプロセスは自己の意味世界の変革につながるもの→言葉の出来事２
言葉の出来事１：「話者－聴衆」状況における出来事･意味も弁証法
言葉の出来事２：「テキスト－読者」状況における構造・解釈の弁証法
１と２を媒介する解釈の伝統、解釈共同体の存在
言葉の出来事の連続性に基づく「史実のイエス」への遡及

９．説教におけるイメージの投入、読み手の想像力に訴える

＜テキストの構造＞

＜イエスの譬えの深層構造＞

１．譬え群

Robert W.Funk, Participant and Plot in the narrative Parables of Jesus, in: *Parables and Presence*,　Fortress, 1982.

２．譬えの範列構造（paradigms）

Daniel Patte, *What is Structural Exegesis ?*　Fortress, 1976.

A.-J. Greimas

A with the functions, the "actants" have been obtained by reducting an infinite set of variables（ the various personages of the various narratives） to a limited number of structural constants--- " actantial roles" or " actants" or sheres of action. Actants are therefore structural elements which should not be confused with the actors of the manifestation.

There are six actants which form together the actantial model:

SENDER	OBJECT	RECEIVER
HELPER	SUBJECT	OPPONENT

In order to aviod any confusion with other usages the terms designating the actants will be capitalized.

The axis of communication: SENDER（destinatuer）, OBJECT（objet）, RECEIVER（destinataire）

The axis of volition: SUBJECT（subjet）, OBJECT（objet）

The axis of power: HELPER（adjuvant）, SUBJECT（subjet）, OPPONENT（opposant）

（41-42）

Good Samaritan:

?	health	wounded man

know-how,oil,wine, donkey, money, innkeeper	Samaritan	Robbers and effects of their action
Jesus	the meaning of "neighbor"	?(lawyer)
the story	Jesus	Jewish exclusivism represented in the scribe

斉藤忠資「イエスの譬話における三行為体構造」、1981 年。
（『聖書学論集１６』日本聖書学研究所編）

３．譬えの連辞構造(syntagms)
Comedy / Tragedy
Dan O. Via, Jr., Kerygma and Comedy in the New Testament. A Structuralist Approach to Hermeneutic, Fortress　1974

８．イエスの譬え解釈３

＜イエスの譬えの読解分析＞

R.W.Funk, The Good Samaritan as Metaphor, Funk(1982)

To summarize: if the auditor, as Jew, understands what it means to be the victim in the ditch in this story, he/she also understands what the kindgom is all about.

Understand in the context of parable means to be drawn into the narrative as the narrative prompts, to take up the rôle assigned by the narrative. The parable is therefore also an invitation to comport oneself as the story indicates: it does not suggest that one behave as a good neighbor like the Samaritan, but that one become the victim in the ditch who is helped by an enemy. Indeed, the parable as metaphor was meant to be permission to so understand oneself. The metaphor is permission because it gives reality that shape.（ibid.,33-34）

C.ミメーシス３：テキストの思想性

１．テキスト構造と読者のイマジネーションとの相互作用（ミメーシス２）
　　テキストという他者との出会い　→　古い自己の在り方への反省
　　新しく示された現実理解の受容
２．テキスト世界の自己化による自己の拡張
３．イエスの譬えにおいて神の国が到来(言葉の出来事)
　　→　生の形態化としてのキリスト教信仰、「キリストの形」になる
　　(キルケゴール)
４．解釈学的プロセス：歴史批判と文学批判に基づく思想批判
　　テキストの言語機能の回復→イメージとの共感、自己の転換、行動

＜意味から指示へ＞　ミメーシス２からミメーシス３へ：
聖書テキストの解釈は何を目指しているか、どこで終了するのか？

５．Norman Perrin, *Jesus and the Language of the Kingdom. Symbols and Metaphor in New Testament Interpretation*.　Fortress　1976
（『新約聖書解釈における象徴と隠喩』教文館、1981年。）

One cannot live everyday on the boundary of human existence in the world, and yet it is to this boundary that one is constantly brought by the parables of Jesus.　（220）

We have the problem of interpreting these word pictures and stories from the past of Jesus and his contemporaries in ancient Palestine into the present of the interpreter and his audience in the modern world.　（220）

Most recently we have seen the American attempts to let the word pictures and stories speak for themselves, using the tools of historical criticism to recreate the circumstances of their first telling and of literary criticism to understand their natural function as language in the new setting of a modern interpretation.　（221）

all our efforts as interpreters must ultimately be geared to that end（to speak for themselves）.It is as important for the interpreter to know where his work ends as it is for him to know anything else about the theory and practice of hermeneutics.　（201f.）

＜「ぶどう園の労働者」の譬え＝マタイ 20 章 1 ～ 16 節＞

20:1 「天の国は次のようにたとえられる。

Ａ：ある家の主人が、ぶどう園で働く労働者を雇うために、夜明けに出かけて行った。2 主人は、一日につき一デナリオンの約束で、労働者をぶどう園に送った。3 また、九時ごろ行ってみると、何もしないで広場に立っている人々がいたので、4 『あなたたちもぶどう園に行きなさい。ふさわしい賃金を払ってやろう』と言った。5 それで、その人たちは出かけて行った。主人は、十二時ごろと三時ごろにまた出て行き、同じようにした。6 五時ごろにも行ってみると、ほかの人々が立っていたので、『なぜ、何もしないで一日中ここに立っているのか』と尋ねると、7 彼らは、『だれも雇ってくれないのです』と言った。主人は彼らに、『あなたたちもぶどう園に行きなさい』と言った。

Ｂ：8 夕方になって、ぶどう園の主人は監督に、『労働者たちを呼んで、最後に来た者から始めて、最初に来た者まで順に賃金を払ってやりなさい』と言った。9 そこで、五時ごろに雇われた人たちが来て、一デナリオンずつ受け取った。10 最初に雇われた人たちが来て、もっと多くもらえるだろうと思っていた。しかし、彼らも一デナリオンずつであった。

Ｃ：11 それで、受け取ると、主人に不平を言った。12 『最後に来たこの連中は、一時間しか働きませんでした。まる一日、暑い中を辛抱して働いたわたしたちと、この連中とを同じ扱いにするとは。』13 主人はその一人に答えた。『友よ、あなたに不当なことはしていない。あなたはわたしと一デナリオンの約束をしたではないか。14 自分の分を受け取って帰りなさい。わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ。15 自分のものを自分のしたいようにしては、いけないか。それとも、わたしの気前のよさをねたむのか。』

16 このように、後にいる者が先になり、先にいる者が後になる。」

６．イエスの譬え研究は、きわめて多くの議論の蓄積があり、本来、こうした先行研究を踏まえた分析が必要。

・本文批判や歴史批判については次の点のみを指摘。文学批評の観点に集中。

・本文批判：解釈すべきテキストを、1 節後半～ 15 節に限定し、またこのテキストの前後を含めたまとまり（19 章 1 節～ 20 章 34 節）の中での考察は行わない。
・歴史批判：イエス時代のユダヤ社会での労働者の状況あるいは賃金の問題。一デナリオンが「１日の賃金に当たる」。
・「ぶどう園の労働者」の譬えの構成：
　三部構成：Ａ：1 節後半～ 7 節、Ｂ：8 節～ 10 節、11 節～ 15 節。
　ＡとＢは、この譬えのクライマックスそして中心であるＣにおける、「最初の労働者」と「主人」のコントラストを理解する上での前提となる物語展開。キリスト教思想という観点で分析の中心となるのはＣ。
・この「最初の労働者」と主人のコントラストは、譬えの聴衆とイエス（あるいはイエスの譬え）の間にも存在している。
　「もっとも多くらえるだろう」という期待は、いわばきわめて合理的なものであり、この期待は聴衆も共有していると思われる。そしてさらに、このコントラストは、「ぶどう園の労働者」の譬えを読む現代と読者と譬えテキストの間にも想定すべきかもしれない。
７．一つの思考実験――必ずこのように読者の思考が進展するというわけではない――。
・「最初の労働者」と主人のコントラストは、「もっと多くもらえるだろう」との期待が裏切られることから始まり、「最初の労働者」の不満の表明とこれに対する主人の主張という仕方で進められる。
・譬えの聴衆が「最初の労働者」と期待――賃金は労働時間あるいは提供した労働量に比例して支払われるべきである――を共有する場合、「最初の労働者」の不満はそのまま聴衆の不満になる。
　物語による認知の伝達は、このように聞き手・読み手が物語内の特定の視点と自らの視点とを重ね合わせることができる場合に、容易に行われる。同じ期待と不満を持つときに、主人の言葉を受けて、聴衆も「最初の労働者」と共に、予想外の答えに対して驚きを禁じ得ない。これは譬えの読者にも当てはまるかもしれない。
・聴衆は、この物語の展開に直面して考え込まざるを得ない（リクール：「悪の象徴」を論じる際に、「象徴は思考を促す」という趣旨の指摘を行っている）。
　・<Le symbole donne a penser>は、リクールが次の文献に収録された「悪のシンボリズム」(La symbolique du mal)を部分の結論章に付けた表題である。Paul Ricoeur, *Philosophie de la Volonté. 2. Finitude et culpabilité*, Aubier, 1960 (1988), 479.
８．たとえば、主人はあまりにも非常識だ、横暴だ、しかしまてよ（ここがポイント）、主人の言うことも一つの理屈かもしれない、一デナリオンが約束だったという点では不正はない？　では、どうして自分たちは不満を感じているのか、不満を感じている自分は何者か・・・。このような思考が聴衆（読者）において進展するとき、そこには驚きを介した新しい認知の生成（＝メッセージの伝達）が発生していることがわかる。
　＝「言葉の出来事２」＝神の国の到来
　・読解プロセスにおいて生成するテキストと読者との相互作用は、キリスト教共同体における聖書読解においてさまざまな仕方で観察できる。特に興味深いのは、テキスト内の「われわれ」と読者の「われ」の同一化であり、たとえば、エマオ途上での復活のイエスの顕現の場面における弟子たちの「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」（ルカ 24 章 32 節）における「わたしたち」に読者は容易に自らを重ね合わせ、自分の信仰体験を容易に思い起こすことが可能であり、「あなたがたには世で苦難がある。しかし、勇気

を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ 16 章 33 節）のイエスの弟子たちへの語りかけを、読者も自分へのイエスの励ましの言葉として聞くことができるのである。

９. 優れた物語とは、読者においてこうした伝達プロセスの展開を促進するような戦略（テキストのストラテジー）を構造的に組み込んだ物語なのである。

10. この「最初の労働者」の不満から驚きへの転換が上記のように発生した場合、それは、自明視された既存の期待感とそれを支える日常的な生の現実を相対化するものとなるかもしれない。ここで、一デナリオンが「１日の賃金に当たる」――多くの日本の読者にとってもっとも手近な『聖書　新共同訳』の「度量衡および通貨」では――とすれば、最初の労働者にも最後の労働者にも、同じ一デナリオンという主張は、現代の読者なら、最低賃金や生活保護の問題と重ねることができるのではないだろうか。一人の人間あるいは一つの家族は、人間として文化的な生活を営む権利（基本的人権）を有しており、賃金はこうした生活の質が可能になる額でなければならない。→　行動へ、読者の実践的世界の転換。

11. 確かに、「最初の労働者」には、一デナリオンではなく、たとえば十デナリオンを支払うべきであるとの議論も可能ではあるが、この譬えにおいでは、おそらくはすべての労働者に最低賃金が保障されるべきであるということが焦点なのであって、十デナリオンは別問題と言うべきであろう。

12. 生活保護へのバッシングが問題化している現代日本において、この譬えはどのような意味を有するかは、きわめて興味深い問題である。ここでは十分な議論を行うことはできないが、この譬えにおける「主人」を神と重ねるならば、「わたしはこの最後の者にも、あなたと同じように支払ってやりたいのだ」は、神が人間に対して抱く配慮の表現として解釈ことが可能になる。神がすべての人間に対して平等の配慮を行う存在である。確かに現実の世界では、最初の労働者と最後の労働者の間に見られる運不運、あるいは格差は歴然として存在する。しかし、人間らしく生きるというレベルにおいて、神はすべての人に一デナリオンを支払ってやりたいと考えているのである。そして、この神の振る舞いは、わたしたちに驚きを生じるのである。

＜参考文献＞

１．芦名定道：

・「宗教的認識と新しい存在」（京都哲学会『哲学研究』第 559 号、1993 年、33-72 頁）。

・「キリスト教信仰と宗教言語」（『哲学研究』第 568 号、1999 年、44-76 頁）。

・「キリスト教思想と宗教言語――象徴・隠喩・テキスト」
（京都大学キリスト教学研究室『キリスト教学研究室紀要』第 3 号、2015 年 3 月、1-18 頁）。

２．Paul Ricouer

・*.La métaphor vive*, Seuil, 1975.

・"Biblical Hermeneutics (*Semeia*. 4, the Society of Biblical Literature)," 1975, pp.27-148.

・*.Interpretation Theory: Discourse and the Surplus of Meaning*, The Texas Christian University Press, 1976.

・*Temps et récit*, Tome I, Tome II, Tome III, Seuil, 1983, 1984, 1985.

３．William A. Beardslee, *Literary Criticism of the New Testament*, Fortress Press, 1969.（ウィリアム・A・ビアズリー『新約聖書と文学批評』ヨルダン社、1983年。）